

わが職場の安全活動について

秋田営林局 真室川営林署

真室川製品事業所

主 任 阿部 隆治
 ○ 班 長 基幹作業職員 後藤 繁
 作業主任者 基幹作業職員 杵沢 廣昭

はじめに

平成7年度の労働災害防止優良事業所として、真室川製品事業所が林野庁長官から「最優秀賞」を授与されたことは誠に光栄であり、営林署職員および事業所職員一同感激であると同時に気の引き締まる思いでいる。

今後も「決められたことは必ず守る、守らせる」をモットーに、職員一丸となつて一層の安全活動に取り組んでいく決意である。

1 真室川製品事業所の概要

当事業所の事業規模は、表「真室川製品事業所の事業規模」のとおりである。

真室川製品事業所の事業規模

	夏	山	冬	山
要 員	定 員 内 基 礎 職 期 定 計	3 2 3 1 2 7 人	定 員 内 基 礎 職 計	3 4 6 4 9 人
作業形態	集材機集材	3セット	集材機集材 トラクタ集材	1セット 5セット
生産量	4, 600 m ³		6, 400 m ³	

2 真室川製品事業所の労働災害の推移

当事業所は、平成2年10月16日に伐倒の準備作業中、「ため柴処理の不適切」が原因で受災して以来、連続無災害日数1, 626日、時間にして53万時間を達成し、7月に表彰されましたが、過去には昭和54年に伐倒作業において重大災害が発生するなど、平成元年度までに数回にわたって不名誉な安全管理重点営林署として指定されている。営林署としても年間の重点目標に「無災害の達成」を掲げ安全活動を展開したが、必ずしも安全指導が末端まで浸透できず徹底を欠いている面もある。この反省に立ち、平成2年度の災害を契機に、全職員参加の話し合いをもち、署・現場一体となった全員参加による安全作業実行体制により災害防止に努めることとした。

なお、当事業所の「過去10年間の年度別・作業種別災害発生状況」は表のとおりである。

過去10年間の年度別・作業種別災害発生状況

年度 区分	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	計	作業種別 発生率
伐倒	1	1	1			1					4	58
荷掛け		1									1	14
荷卸し					1						1	14
計測				1							1	14
計	1	2	1	1	1	1					7	100
年度別 発生率	14	30	14	14	14	14					100	

3 安全活動の取り組み

災害事例を分析してみれば「なぜあの時、あのようなことをしてしまったのか」という、普通では考えられない不安全行動によるものとなっている。また、安全には近道もなければ特効薬もないといわれていることから、地道に作業基準・心得等の「守るべきことは必ず守る、守らせる」ことが必要である。そのために具体的にどうすればよいか、署・現場が一丸となった徹底した話し合いを行い、作業員一人ひとりが「ケガをしない、ケガを出させない」を合い言葉に、次のことを実施することとした。

(1) 健康状態のチェックの徹底

私達の職場は毎日地形・作業条件の違うところでの作業であり、銛やチェーンソー等の刃物を使い一歩誤れば大きな事故に結び付きかねない状況での作業を行っており、作業の節々での集中力・注意力が要求される。もし、健康がすぐれず気持ちが散漫であれば不測の事態が心配される。このことから、班長、副班長は毎朝の作業指示に当たって、各自の健康状態を聞き取り、その者の体調に応じた作業配置を行い、ウツカリミスによる災害の未然防止に努めている。

(2) 作業員相互の注意の徹底

① 毎朝行われるミーティングにおいては、前日の伐倒者及び荷掛者等の作業員から当日の作業の引継と、特に注意すべき事項を発表させることにしている。そのことによって仲間の連帯感が生まれ、仲間同志気兼ねなくなんでも話し合える雰囲気醸成するとともに、当日の作業で、どこを、どのように注意すべきかを把握することにもなる。

② また、なんでも話し合える職場の雰囲気づくりから、仲間の不安全行動を見た場合は、直ちに大声で注意する相互注意運動と作業の再開時など、お互いに声を掛け合い一声掛け運動を定着した。

(3) ヒヤリ・ハットの話し合える職場

私達の扱っている丸太は「大きくて、重くて、丸い」ので、いつでも動き出

す危険があり、ひとたび動き出したら止まらないという危険でやっかいなものである。

そのような危険なものと同様に隣り合わせで常に仕事をしており、職場では誰しもが日常の作業中にヒヤリ・ハットを体験している。それを恥ずかしがらず、隠さず勇気を持って毎月実施される安全座談会や毎朝のミーティングにおいて発表することによって、仲間が危険要因を自覚し、不安全行動・不安全状態を排除した中で作業ができ、災害の未然防止を図ることができる。職場内でヒヤリ・ハットの体験を、自然体でなんでも気軽に話し合える雰囲気作りに各人が努め、日頃から「仲間の和」を大切に、連帯感を保ちながら当該セットからは「絶対ケガを出さない、出してはならない」という信念で作業にあたっている。

(4) ワンポイントKYTの実施

毎朝、セット毎に5分程度のワンポイントKYTを実施し、当日の作業に応じた危険因子の洗い出しを行い、今日の作業にあたってこんなことを注意しようと思いで誓い合い、危険に対する感受性を鋭くして作業に着手している。

また、作業の要所要所で自分の今行っている作業が正しいかどうか確認し、集中力を高めるための指差呼称を実施するなど、みんなで安全に心掛けた作業を行っている。

(5) 的確な作業指示の実施

作業指示に当たって、前日の現地の状況、作業の進行状況を話し合い、その状況を踏まえて作業の順序、人の配置、安全上特に注意すべき事項を的確に指示している。また、指示を受けた者は簡潔に復唱し、作業地に赴く前に自らマグネットボタンを作業配置板に作業位置を明示することにより、当日の作業に対する一人ひとりの自覚を高めることにつながっている。

作業の終わりには、自らマグネットボタンを作業配置板からはずし所定の位置にしまい、同時に1日の作業を振りかえり、次の作業者に引き継ぐため作業の進行状況、作業地の状況等を簡潔にまとめ、急ぐものは直ちに報告することとしている。

また、作業指示にあたり具体的に指示しなければならないことや、話し合いの場を設けなければならない場合は黒板を利用し、全員の認識の一致を図り作業に着手させることとしている。

(6) 作業意欲の向上

林業の中でも集材機集材は、ワイヤーロープを使って作業を行うことから「きつい、汚い、危険」と3Kとも言われているが、これを少しでも緩和するために当事業所では作業仕組み、作業器具の改善提案を積極的に推奨しており、その一つひとつの積み重ねが、安全作業に直結する技術の開発として現れ、そのことが職場内での連帯感となり災害の減少に繋がっている。

ちなみに、昭和59年度「かかり木処理器の考案について」、昭和61年度「ハンガーロープとスリングロープの連結器具の考案について」、平成元年度

「簡易盤台の作設と玉切装置の改良について」、平成3年度「集材機の自動巻取器の考案について」等を発表している。なかでも平成元年度に簡易盤台の作設と玉切装置の改良では、盤台作設の期間短縮と経費の節減が認められ管林局において日本林業技術協会賞を受賞。平成4年度には集材機の作業索の自動巻取器で、中腰作業の排除と安全衛生の向上が図られることが認められ、林野庁の業務研究発表会において、林業技術協会賞を受賞している。

(7) 緑十字等の安全指導

緑十字の安全指導は、全管理者と事業担当係長が各現場に出向き毎月始業時から、「安全管理者会議」での指示内容、「安全衛生委員会」の答申内容、安全衛生推進室から送付される「安全関係今週の指導」の内容を伝達し、併せて管理者等が特に必要と考えている項目を具体的に指導している。

また、それぞれの作業者と座談会では日頃考えていることを腹を割って話し合い、上位下達が円滑にいくよう日頃からの疎通を大切にする。

なお、夏山、冬山事業開始時には、全員で各作業現場を踏査し、林地の状況、危険個所の有無等山の状況を確認するとともに、つるからみ、かかり木等の危険木の標示を、行うなど、各人が責任を持った安全で効率的な作業をするため、意欲を持った行動をしている。

平成8年1月26日

安全管理者殿

主任安全管理者

2月期 緑十字における安全指導

I 実施年月日 平成8年2月1日 現場の始業時から

II 安全指導の担当箇所

事業所等	指導者	備考
青空川(製品) 1・2号セット(水上沢)	次長	
〃 3・4号セット(水上沢)	総務課長	
〃 5・6号セット(水上沢)	業務管理官	
大瀬森林事務所	業務課長	

注:各担当者は、安全指導の実施箇所及び使用する車は各自手配すること。

III 指導事項

- 的確なミーティングの実施について(全員が同じ気持ちで作業する。作業を変更するときは再度ミーティングを行い全員で確認する等)
- 連絡・合図・復唱(確認)の実施について(作業者間の認識を一致させ作業に取りかかる。特にトラクタ運転手と荷掛手及び荷卸手。等)
- 周囲の状況や足元確認について(降雪による転倒事故防止、ため柴、ため木等反発物の確認等。)
- 隣接セットとの意思の疎通について(隣接セットとの接近、上下作業の禁止等)
- かかり木の処理(強風時の伐倒見合わせ、全業務中止してかかり木の排除等)
- 雪崩災害防止について(特に造林事業で危険個所があれば対策を講ずる。)
- 過労災害でマイナス志向にならないよう(我が冴の場合、過労、油断に注意)
- 2月23日研究発表、2月27日災害防止協議会、我が冴の安全活動が試される
- 自主健康管理(厳冬期の健康管理等)・交通事故防止(余裕を持った運転等)について
- その他必要と思われる事項について指導すること。

4 当事業所職員の安全に対する意識調査

当事業所職員の意識調査を実施したところ、次のような結果が得られた。

(1) 12項目の中から3項目を選択することとし、「過去に発生した災害で主な原因と思われるものは何か」という質問に対し、

	生産所属	造林所属
○ やってはいけないことを知っててやった	33%	33%
○ 作業者間の協力・協調がない	25	20
○ 先輩の言いつけに従わなければならない	19	15
○ 誰も注意しない	8	8
○ 生産量が多い	8	8
○ やってはいけないことがわからない	3	7

(2) 次に「無災害が継続できるか」という質問に対し

	生産所属	造林所属
○ できる	95%	80%
○ できない	5	20

(3) 「無災害を継続するために必要なものは何か」という質問に対し

	生産所属	造林所属
○ 安全活動の充実	57%	50%
○ 作業仲間協力・協調	39	40
○ 安全指導の強化	4	10

(4) 「安全活動で特に強化すべき事項は何だと思えますか」という質問に対し

	生産所属	造林所属
○ 作業指示の充実	50%	27%
○ 相互注意の徹底	40	64
○ K Y Tの充実	10	
○ 健康チェック		9

このアンケートでもわかるように、災害発生の主な原因について全員から「やっってはならないことを知りつつもやってしまった」という結果が出ているが、その原因の一つとして、昔は先輩、後輩の絆が強く、先輩に対し反論できず、疑問を持ちながらも言われたことをやらざるを得なかったことがあげられる。

今は、作業仲間間の意思の疎通、協力の重要性を各人が認識しており、仕事上のことであれば何でも話し合える、素直な気持ちで他人の話を聞く職場に変わってきたことが、災害減少の一番大きな要因と考えている。

5 おわりに

当事業所の安全の取り組みは、健康で明るくチームワークのとれた闊達な職場を醸成する中で、ヒヤリ・ハットの報告、K Y T・危険予知訓練の実施、指示事項の復唱など一人ひとりの自覚、そし一声掛け運動と、全員の協力、努力で「目標を達成した、ひと仕事やった」という一人ひとりのヤロウ、ヤルゾという自主性を持った活動、そして日頃の安全活動の実践、その積み重ねが、無災害継続の糧になっているものと考えている。

本日の発表を契機として、安全は一人ひとりの安全活動の実践にあるという原点に戻り、さらに無災害の継続に向け頑張りたいと思う。